

翻刻 『尊氏將軍二代鑑』(下)

翻刻の会

- 一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 疊字は、平仮名は「ヽ」、片仮名は「ㇿ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
 - 9 底本の不明箇所は適宜同板の他本で補ったが、特に断らなかつた。
- 二、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。
- 菅谷志乃、三上貴子、水山知春
- 文字譜、改行、本文の最終確認は山田和人が担当した。

ならぬぬれ男。打詠めきてしなの成ル。あさまの嶽に。立煙見やは。とがめぬ口号。みかはの国に。着給ひ。我住里の八ツ橋のさはべに匂ふ杜若。其五もじを匂の上につらね給ひしから衣きつ、なれにし妻しあれば。はるくきぬる旅をしぞ。思ふはならひ思はぬも。見すて、通る人はなし。花咲く水の浅からず。我も契りをかけ渡す。蜘蛛に物を思ふ身の。しらぬむかしの物語りおぼろ。くの月やあらぬ。春やむかしの。春ならぬ我身一つはもとの身の。流れに苗を。すくふべし。聞けばやさしき里人やな。本覚真女の身をわけていもせの神と(七十六ウ)いはれしも。只業平の名にしおふ花の若苗諸共に。いたはり引て参らせんとあゆみつれ立野辺の道。畦の細道。枝道に夏草。しげくふみ分けてこの池水かしの沼。しよろく小川。しよほぬれて。此さは水の花の色。浅紫も八ツ橋の水にうつせば。夕ぐれに。猶も美き杜若。わか紫に袖をすり袂をへひたし裙を染色は何れ。似たりやく。あやめまこもの花あれとかは。これに及ぶべき数の若なへ。ねもころに今は馴ぬるこ、ちして。早苗にあらでゆひやとふ手ン々に。はこぶ杜若花は。あじかにみちにけり。侍従は繁に打向ひ。(七十七オ)都の外はしらぬ身の旅の勞れに日をくらし。いづくに泊る方もなしことには是なる連の尼。少し勞り候へば。かく若なへを取り参らせしもお宿を頼む下タ心。一ト夜宿させ給へやとしほく。として頼みける。いたはし御シことやわたしも心付キながら。母様兄様持し身の。思ひ煩ひ候がかく頼みの其上は。よきに申してとめませんいざ、せ給へと。有りければ。兄弟嬉しさ限りなくよき人頼み参らせて。いなにはあらぬいな舟のひきつれ急ぐ末の原。野原いばら野花分けて白き素足を紅粉鹿子。いふにいはれぬ身の上の。あれ野を跡に花の瀧たへず。流れ(七十七ウ)て水くゞる岩間く。しつかとく。手を引合つ大屋川。渡りくつて八ツ橋の。村先きに立ッ花守がわらやの。内へと三重へ入にける

名も高き。三河ノ国。八ッ橋とて蜘蛛にかけし板橋を。昔シ男も哥によみ旅の心をおしまれし。さはべに匂ふ杜若紫。ふくむ花のかをかほよ花共名付ケたり。

かたへに結ぶ柴の庵。八ッ橋の喜作とて。昔シは公家の扶持も取り今は小村のつゝを取り。名主の竈へめぐりて母妹に甥子

をそへ。からだ一つに四人口身代よもに隠れなき。ふけばちるてふ花の番。村の下役小働に小腰かゝめて世を渡る。

貧しきなかに一トもを生て樂しむ(七十八才)竹のつゝ。旦那がたへの追従も功だつものに杜若。花は喜作が手の物と

さすも隙なくくれ急ぐ。妹の繁は千代松がなくをすかしてきやうこつ声。是兄様。三つや四つのおさな子が。花おつたとて

太股に青筋。口でしかつてくださんせ。昼時からくれかた迄。しよたいしらすのゑよう花。置いてもらをとやり出せば。兄

の喜作はむつと貞。ヤイベりめ。日くれ迄の花。おのれに見されと頼みはせぬ。池鯉鮒の旦那衆夜咄シのお客へ。馳走に

したいとお頼み。いやといふと喉がひやがる。此結構な家を預かり。花守するは村のお影。がきめがじやまひ(七十八ウ)

ろぐ故。ひねり餅であつかふた。しよたいしつたら己レから。嗜おるとつかふとに。いはれてゐぬ下地の腹立ち。そりや

何シのこと。尺長一枚箸かたし何をしよたいのどくをした。嗜むことの筋聞ふ。ヲいふて聞そふ。一昨日つれ立ッて戻つた

おくの尼二人。旅づかれの一夜を情ごかしにけふ三日。宿銭シ有ルやらないやら。まあ是からがしよたいの毒。是それは

の。つれの尼様が病氣とて。じひぶかい母様のさはい。おけく。お前花のけいはくで己レがすゝめ。正心な身体くひ立ら

れ米櫃がうけに成ル。前置キぬかすとほひ出すと。りきみか、ればコリヤ面白い。(七十九才)サアならば引キ出しやと。こ

ともなきこといひ上り。ヲ其口へ込ミわらをと。まけずおとらず立ちかゝる。

千代松地ハルわつと泣キ出し。おち様こらへて。か、様逃てとおさな子の中ウにうろつくしほらしき。鉢はちと茶ちやわんの兄弟が。われる所ウもおのづ中から。ひフシき計ウでおさまりぬ。

一地ハル間の母は聞ウづらくまして宿かる尼達も。氣ウノ毒余り諸共に母ウにひつそひ立チ出る。子をせいするは親の役。兄弟ならば中に立チ。さいぜんからのせり合イ兄のいやるが皆尤。かまはずと花を立テて旦那衆のお氣にいりや。ヤイ妹。なぜ口からは生れたぞ。いふまいこと聞クまいこと詞数からわらが出る。二人(七十九ウ)の尼御も迷めい惑わくがりわび言ことにお出。人に迄ク苦をかけるおたしなみやれとしかられてふいとふり切ルトいぶり。二人の尼は手をつかへ。兄御様の御立腹我々からことおこる。此人地色中の病氣故思はずも長逗留。快いと申ス故明日早々立ハル支度。とてものことによひ一夜御了簡とみんぎんに。いたみ入たるわびのてい。向ふ猪とて喜作はにやほや。ハレやくたいもないこと。兄弟喧げん嘩はは内証なむせうこと。かまはずと御逗留。

や池鯉鮒ちりふの旦那衆夜ぶる廻イのあつらへ花。もつて参ると足ばやに。氣ウノ毒ぬける挨拶あいさつも花フシにかこつけ出て行ク。

母は千代松膝ひざに取りうスエテきを。悲かなしむ親心ち。(八十オ)ナフおふたりの尼御達。御存シない京物語りも。娘にるけんをするついで。もと我々は大内者。子細あつて長々の浪人。娘もいやしき奉公縁えんでこそあれ。歴れき々の何が、となじみ。此子をもふけしはほうは十分シ。みつればかくる世のならひ。早先はやくき様には御本ハルン妻定まり。遠慮えんりょくとせウばめられ。御家老のはからひにて。おりめ極めの御ウふち方。孫が出世を待ツ所に。何なんとしてかは四五ヶ月。御ふちもこそ便りもなく。次第にうすやく縁の道。娘がいぶりもあなたに御存ジ。賤いやしき腹はらと沙汰さたせられ。孫が出世のかい共なり。一期一生花守りの。喜作ハルが跡をつがふかと。あんじ(八十ウ)すごしがせらる、と打ウツしほ。れてぞ語ハルらる、。

娘めづの繁しげは尤もと思おもひながらも口くちづよく。ア、か、様のなんのいな。たとへわしはうとまれても千代松ちよまつは殿たねの胤つぎ。一国いちこくの御世おんよ継つぎ。
大船おほねに乗のつたより慥たじかなこと、いふを打うけしそれく。其高たかぐ、りが女の猿さるちゑ。殿たねの胤つぎ故こ猶なほ氣遣きぢい。御台所みだいのりんき深く。
恨うらみつらみにあふ時は出世望しゅっせいぼうはたへたこと。みつぎのこぬも本ほん妻つまのわざとならでは思おもはれぬ。此子こ一人ひとりの果報くはほうにて其身みは
勿論もちろん親兄おんあに迄まで。金かねの花はなをさかす身みが。日陰かげにすほむ花はなの番ばん。口くちおしいとは思おもはぬか。此子こはかはゆふないか。あいそづかしを
いふ口くちで。お世よ（八十一才）話わでござると兄親あにへ。礼れいいふことを得えしらぬか。氣きま、者ものめあほうめと。呵ある内うちにも恩愛おんあいの。
ふびんがこもる袖そで涙なみだ。娘むすめはとかふ泣なきたをれ。二人ふたりの尼にも千代松ちよまつも。氣き毒どく涙なみだ袖そでぬらす。

挨拶あいさつしかね姉あねの尼に。わけしらね共追とも従じゆう口くち。御袋ごふくろ様さまの御おみけんはお身の為ため孫御まごのいとしさ。察さつする所本ほん妻つまのがまんどめ
る御おんふち方かた。根ねをたつて葉はをからすもりんきの上うへでは有あらひ。おせうし様さまやとばいかけて。たき付つきケ口くちも母親ははへ。宿しゆくか
る為ための種たねならん。

妹いもうとの尼には病氣びやうき故始こ終詞しゆうじもなかりしが。娘むすめの繁しげを撫なでさすり。いとおしのお心こころや。歎なげきは道理道理さりながら。世よに有あル（八十一
ウ）夫おつとをうらむるはにくい内うちにも便べんりあり。我々われわれ夫おつとを先まキ立てかくなり果はし墨すみの袖そで。却かへつて而してお前まへが羨うらやましい。末頼すえたのりみ有あル御身おんみ
にて必歎かなかせ給たまふなど。よきにいたはり抱たかおこし。病びやうイ有あル身みのかいほうに。娘むすめは母ははの一言ひとことと常つねの妬ねたみのますかゞみ。胸むねより
てらす貞まことの紅葉かきばら。妹いもうとニには見合みあせてぞつと身みの毛けも下地くだちのよはみあつと計はかりに玉たまぎれば。コハいかにと姉あねの尼に。助すけけおこせば母
娘むすめ共ともにかいほう。水みづそ、ぎ漸しだ。いき出る人ひとご、ち。氣きうつの性しやうかしく持もチか先々さきさき與あで養生やうじやうと。孫まごが手てを引ひ老おいの身みに。い
たはられ行いく旅たびの尼世によは情なさけなり怨あつにとは。思おもひがけなく入いりにける。（八十二才）

娘の繁は。常よりも心乱るゝしつとの道。げに本妻の有ル内は我子の出世は叶ふまじ。され共五日路七日路の道を隔し都の空。女の身にて何とせん。ヲ、今宵こそ神々に。祈をかけし八ッ橋の鬼女共いへ蛇共いへ。我子の為になすわざを。あはれと思へくる髪も乱れ心やへとときながす。まき糸の手箱。鏡台に。姿を。うつす丸鏡。我邪を正直に。うつる心の恥かしや。女は化粧。けはひとて。みめかたちを作る身の。亥の刻ごろにかね付て。けはひする身も化粧のすがたはぐろの水は鉄のさび我身のさびにふしこめて。かみしめる齒は命毛に(八十二ウ)よそもめへつらき身のとがを。誰が引あふて渡しがね。にくしゝを常ながら。心の底にふくみ水。人をのろへば身をのろふいつそ死たや苦のせかい。それもま、ならア、ま、よ。ま、にならぬを世の中と。いふにいはれぬ。乱れがみ島田に。かけえし。櫛を取り。みつにへだて、三つのかど。三つは三津のおきつ浪。胸に打込たきつせは。やをや万ツのかみ筋も。むすぼれとけぬ。くしのはに。かゝる思ひはよもしらじ。たけなるかみも。おのづから。乱れ初にし我ならで。なくも笑ふもたゞひとり。人こそしらねよきじぶんと。庭の間を時参り。窺ひ行そ(八十三オ)物すこき。三合一知と聞ク時は。口も心も姿もひとつ。花も名にあふ杜若。かほよ花共ひとつのトもと。其うらめしきは貞よ姫。花に其とがなけれ共。かほよといへば杜若。一トもと切ッては。あらうれしや。とはいひながら此花も。なつより秋の末葉迄。盛をおしむ。身なれ共。花に嵐の敵あり。恋にねたみはそひぶしのあだに思はぬしるしには。世つぎのたねをうみおとし。けふをくらせばあすを待ちまつに。かひなき。ほと、ぎすほぞんも二世もかけおびの。とけてほどけてむすぼれて。親子四人がうきつらさ思ひしらずや思ひしれ(八十三ウ)何思はずも心よふ。咲いたるかほよ見るもいや。いやといふてはてうと切り。つらやといふてははたときり。生て置ては我子のあた。命とらん

と橋の本。近づきよるぞ恐ろしき。

サアとてもこと此橋を。砥鹿明神の神木とはんじ。思ひ込だるうらみの釘たとへ国は隔つる共。貞よ姫が胸いたへ。こたへぬことはよも有ルまじ。南無吉田八面神戸の明神。子故のやみの我心。あはれみ給へと一心に。性根かためしつとの金鎖ふり上ケ。丁々てうど打込ム八ツ橋の。くだけ落べき有様は身の毛も。よだつ計なり。

何とか有りけん(八十四オ)一ト間の内。のふくるしやと旅人が。障子押明ケかなしむ声。南無三三人こそと思ひながらも又ふり上ケ。かつしとてばこなたはぎつくり。てうど打テばやらせつなや。命もきゆる息される。姉様おきてとゆするけはしき。こはいかにと姉の尼。おどろきさはぎやれあるじ殿。妹が病イ薬リよ水よと呼はる声。主シの母は走り出したはりか、へ気付ケの一ト口。正気つきしか妹御とよび生る声さはがしき。

釘打ツ繁はふしぎの思ひ。物はためしと釘のうへ。かつしとてばあつと玉ぎるこなたの病人。重ねてうてば重ねてこたへ植の(八十四ウ)数程身をもがく。こはそもいかにと釘金鎖。袖に隠して小柴垣身をひそめてぞ忍ひある。悲しさ余り姉の尼。泣クもなかれずうろくと。だいつさすりつ身をあせる。

しばしばしづまる病人は。さもくるしげ成息の下。あらふしぎや。とろくまどろむ枕もと。我名をよんで貞よ姫。思ひしれと心もと。さし通しさし通さるゝ其くるしき。覚ては夢と思へ共。胸のせつなさたへがたや。我レし、たらば姉様の力も便りも有ルまいと。思ひ過して悲しいと。いふ声涙姉諸共。すがり泣キ入ル計なり。

主シの母は病人の。貞よといへる名に(八十五オ)付ケて。お国はいづくいか成人。もしもの時のお為にもと。心ありげに

尋ぬれば。姉の尼涙をおさへ。かく迄おせわお情に。何をかくさん我々は。塩冶判官高貞殿のゆかりの者と。聞て扱こそして。二人共。尼の姿はいか成ル故。子細あらんとねちよりすりより。聞ク母よりも忍びある。繁は柴垣おし分ケ。耳そばだて、うかゞひ聞ク。

さればとよ兄弟共伴良と云医者いしやの娘。此妹は若子の時。大納言通兼卿と云お公家方にもらはれ。兄弟のなのりも此春。大内は恋所忍び夫有ル妹を。塩冶殿の妻に下されぜひなき(八十五ウ)。祝言。ことをわけ子細を語り夫婦の縁切り。尋ぬる夫はわらはがつま則塩冶殿の弟。男一人りに女房二人り。様子有て塩冶殿も。直義に亡ぼされお行ク衛しれず。我々が夫も切腹。自ラふたりは望有ル身。命ながらへ後世ほだい一ツは大望成就と。かやうにさまよひ侍ふと。語る内より母は勿論。隠れうかゞふ娘の繁。ねたみも怨もなきものを。面目なや恥かしやと。我レと我身にはちもみぢしげみに。身をぞひやしける。主シの母は立ちなをり。扱は大納言通兼卿の御娘。幼名はしの、め様。貞よ姫とはお前のことか。勿体ない(八十六才)さは存ぜず。塩冶の御台。貞よくとにくんだる。冥加しらずの我々。おゆるしあれと侘る体。こなたもふしぎとそれはまあ。何故のお恨ぞ。幼名迄も御存シはいか成ル人の末ならん。聞カまほしやと有リければ。

今更申スも恥かしながら。娘の繁は岡崎にて。繁のると申せし傾城。一トとせ塩冶殿当様国矢矧戦の折りから。軍場のつれづれに召れ御胤やどし。世継の若と悦びいさみ。はるる都へ上りしに。塩冶殿には貞よ姫と云御本妻定り。おやかたへ足ぶみならず。追ツかへされたる其恨。又姫君の幼名を存ぜしは。則兄の喜作こそ。妹君の御(八十六ウ)。養父。大納言通兼卿の御家人。近藤太郎春久と申せし者。御けらいと申シ塩冶方。必御遠慮御無用と。語るに付ケて姉の尼妹の病人諸共

に。何大納言のけらい近藤太郎とは此家の主シカ。それこそ我々尋ぬる敵。いづくに有ルぞいで勝負と。身拵する二人が有様。母はびつくりとは何故。子細聞んと立ちなをる。

勢地色とこんでも病人のなやむにつれて姉の尼。無念悲しい目を押拭おしぬぐい。昔詞シかたるも十八年。比は冬至七日の夜。父はすか所の疵きづをおひ。よろほひやかたに立帰り。口おしや大なごん通兼卿のけらい。近藤太郎と云者にだまし(八十七才)討チチにうたれしと。いふ一言が此世のわかれ。母様も三年いぜんに御臨終ごりんじゆう。親の敵を必うてと。くれぐれの遺言ゆいごん。妹にも語り聞せ。

敵にあふたら出合たら。及ばずながら一ト刀と。けふ負の今迄思ひしに力に思ふ妹は。今ハルを限りの此ふぜい。共にみだる、我心何と本シ望とげらりやう。みらいの父上母様へ二人りの者のいひ分ケに。喜作殿の足先キ手先。爪切り取ッても親への孝行情と思ふてお袋ふくろ。一寸なりと切ラせてと。云に貞色よは声ふるひ。ナフ主詞シの母は其むかし。けらいとあれば主の恩。忘れは

せまい忘れたら。返り討チチにうつてとれ。かく成り果し兄弟が。行末何と成ルべきと。(八十七才)語るも涙聞ク涙。思ひに沈しづむ母よりも。娘の繁うは柴しばかけの。遠く泣ウク身は打過ウシ。針フシの教程ハルくやみ泣キ。

母は主命子の不便ハル。二つの道に迷まよひしが。いつまで生いん我命。それよくと一人りうなづき。胸ハルなでおろし立色なをり。十八年いぜん冬至七日の夜。風来者ふうらいをうつたりと申シ。都を立のきそれより浪人。扱は御兄弟の親御よな。左様共存せず。此は、が口故本名を明カシ。我子の怨をたを引き出せしも天の罰ばち。遁のがれぬ所お主の為。自ウラが手引して一ト太刀はお腹いっはみせ。御本シ望とげさせんと云に驚色き。それ詞はまあ真実か。但は智略ちりやくか。勿地ハル体ハルないなんの偽いつはり。あの(八十八才)一ト間こそ兄が部屋。帰地中りて寢間ねまに入ハルルと其ま、障ウ子じをならさんそれを相ウ図ウに。鼠ねづみつきのあの鍵かぎ。ひつさげて障子しこし。勢中ひこんでつき給ハへ。

必容捨遊ばすなど。しめし合する其内に。貞^ウ姫の身の病^{ハル}イ。くるしみつゝのる病^{やむ}めより。見るめもつらく姉の尼。母諸共にいたはりか、へ。夜露いとふて引^ウキ立る。障子の内で歎^{なげ}く声。すゝむる声は念仏の。力を頼む死出の道^ちついに^上はかなく成り給ふ。アツト泣^キ入ル内外の。歎きは同じ歎^キきぞと繁^{ノル}は。身^{ハル}をもみ泣^キゐたる。

折^中から戻る兄の喜作。夜咄^シのほろよひ。戻^ウつたく戻^{ハル}りましたも酒の足。繁は嬉しくナフ(八十八ウ)待兼し咄^シすこといふこと有り^と立よれば。ほつと酒けの鼻にしみ。へエ、又しても酒びたし。大事小事の談^{だん}合もならず。兄^{ハル}様もたぬも同然^ウと。

小腹立^ツ程^色ねだり声。ヤイこ、な妹のうつゝめ。かはいや何^シにもしらぬな。夜咄^シで都の騒動^{きょうどう}聞てきた。びつくりすなど咄^シかゝるを。コレ都の騒動とは塩治様のお身の上のことか。扱^ツもすいめ。サア其塩殿がな。あのな。ヲ、くど。直義^{なよむ}の為に^色お家が亡びたと云^詞ことしつてゐる。テモ見通しめ。去りながらそちが常々^{つねづ}。にくいくといふ貞よひめはな。コリヤよふ聞^ケよ。聞^ケくに及ばぬいぜんのお主の姫君。しのゝめ様と(八十九オ)いふことしつてゐる。こりやたまらぬ。いつそ其方^{そち}から咄^シさぬかと。咄^シの腰も我^がもおれて。巻舌^{まきした}も猶かゞみける。

ナフ兄様。いふこともあれどこよひは酒きげん。夜更^地ぬ内にお休^ウみと。云^{ハル}に随^色ひ立上^詞り。ヲ、其いふことは酒のいけんか。知^してゐる。咄^シの先^キ折^ルも己^レがくせ。知^ツてゐる。其外に珍^{めづ}らしいことは。尼殺^シがあつたとやいエ、。それ^地はと胸^{ハル}に釘^{くぎ}金^か錠^{なづ}。こたへもつよくそりやとこで。なまぜ川^詞で。新^{あた}しいか。是^地で咄^シの色上^ケたと笑^ウふてへ奥^ウに入り^{ハル}にける。

何^地心^ウなくいふ詞^{ハル}繁は身にしみ身にこたへ。跡詠^ウめやるおくの間に。千代松がめさましてか、様尋^ウぬるなき声に。百^ウ千万(八十九ウ)の用役も打捨^ウ走る親の身は。子にはだ足の音高^{フシ}く。目^{ハル}覚^めぬ内とかけり行。

八声地色ウの鳥の比過キテて姉ウの侍従は折よしと。手鑑ハルひつさげ此間ウこそ。兄の喜作が部屋中ならん。主シの相図は真まか偽うそか。いづれにもせよ敵の節目。妹へんにわかれし我からだ死物狂ひと心すへ。忍び窺中ふ折からに。障子ウでしらする相図のがたつき。シヤ約束ウたがへぬ老おひの義理立て。今ハルぞ日比の本望と。飛上ハルつて障子ウごし。ぐつとつき込ウ向ウふは血煙ちけふり。やら嬉しやと声色はり上。和調気伴良が娘。親の敵近藤太郎。思地ハルひしれと一ト多ぐり。多ぐるもつよき声に驚き。兄の喜作は（九十才）飛色で出。ヤアうろたへ者。近藤太郎は是に有り。やさしき女に命をくれん。か、れやつとよば、れば。南無三宝と鑑引ぬき。主シの母が相図せしを真まと思ひ。たばかられし無念やとつき込ム鑑先。ひつはづしてしつかと取り。やあく詞尼御。母が相図とは心へず。見れば障子も血ちに染そまる。さつする所母人が我レにかはり御さいごと覚たり。一生のわかれ息たへぬ内一言いひたし。暫地ウく容捨ようたと鑑みおとし。一ト間に走り障子へん明れば。母は堅固けんこに千代松いだし。妹ウの繁が血にまぶれ。コハいかにとだき起おこし。いたはり出れば尼は驚き。やれ一夜の宿も此人の恩。怨あてかやせしきのどくと。（九十ウ）共にいたはる敵どし。母は悲地色中しさやるかたも。涙ウにくもる声を上ケテウこそは兄が為ウうたれんとこそ思ひしに。一ト足遅おそき部屋の内。思はず娘にせんこされし。口おしや残念やと。死しを争あひし親子中のなかけなげにも又あはれ也。

喜作詞は涙をうかめ。母人の心ざし妹が心底。忝かたじけなくいがさすがは女儀。もと伴良を討ツたるは良よ姫のお為其子細は。主人の姫君みわらの上にてそれ給ひ。産後の歎なげきを救すはん為。密ひそかに伴良が姫をもらひ。御実子ごまじと奏問そうもんし御寵愛ごちゆうあい有あしに。音信いんしん不通つうつうの約束ウをちがへ。御やかたへ推参し親がほにての我ま、きやつ生いおかばお家のあた。姫（九十一才）君のお名のよこれと。出くはせしを幸さいに切り付ケし一ト刀。皆是お家姫君のお為。ことをわけて申シ聞きさば尼達の恨も有ルまじ。へエ、残念や不便地ハルや

と。語る内より目に溜^{たま}る。涙は親子兄弟の血筋^{中ラシ}の。糸とむすぼる、。

娘^{地色}の繁はくるしげに。ナフ自ラがしぬるのを。兄様の身がはりとは申^ウスもおろか勿体^中なや。我こそさいぜん死^し給ふ。妹御^{いへ}の

御敵。首打^ウッてたべサア〜と。さし付^ツケられ姉^色の尼。そりや何^ニごとをの給ふぞ。我妹は病死^{びやうし}する外に根はなきぞとよ。お

ろかの仰侍^ウふや。剣^{ツウ}で人を殺^{ころ}さねば。討^うれぬ物とおぼすかや。貞^中よ姫をねたましと。思^{ハル}ひ込だるみとせ(九十一ウ)此かた。

つもり〜し一念^ウが。病^ウイとなつてけふの今。とゞめさいたる我劍。是見^ウ給へと袂^{ハル}より取り出^{ハル}したる釘金鎖。母も侍従も兄

諸共。ぞつと身の毛も立^{フシ}のぼる。

猶^{地色}も指^{ゆび}さず庭^{いん}の面。あれ御らん候へ庭前^{かまつばた}の杜若。かほよ花と言名^{ハル}をかたどり。植^うては切り〜。百日の大願^ウこよひ上りに

橋板^ウへ。打込^ウム釘に血走^中りて。お命取^{フシ}りしは。我成^{ハル}ルぞや。其咎^{とが}ゆるさぬ天^{ハル}の道。所^ウかはらず同じ日に。つ、込れたる鍔^ウの先。

釘^ウの先より報^{むく}ひのはやさ。遁^{ごん}れぬ罪科^{ざいこ}と明らかめて。お歎^うき有^{ハル}ルな母様。兄様いさめて給^ウはれと。清^{きよ}くはいへど我子の顔。詠

めてちやつとうつふきし。心^{フシ}ぞ思^ウひやら(九十二オ)れる。

兄^{地色}は涙^ウを押^ウぬぐひ。母千代^{ハル}代向^色ふにすへ。コリヤ〜妹。親子は一世と大きくからは今わかる、が生^{地中}々世々。なごりをおしめ

と有^ウりければ。母様^{ハル}お先へ死^ウまする。跡^ウでおせわ、此千代松。コレか、は遠いへ行程に。跡^ウで尋^ウてたもんなや。七つになら

ば花^ウうりて。祖母^ば様へ宮^{みや}づかへ。煩^{わづら}はぬやうけがせぬやう。わやくであいそつかされな。親のない身と子^ウ心にも。思^ウふて遠

慮^ウしたもと。うきを重^かる涙^ウにも。千代松は合^あ点^{てん}せず。侍^侍イにして馬^ウにのせ。鍔^ウつかそふといふてから。花^ウ売^うせいととはおり

やいや〜。しなしやる所へおれもいこ。つれていて下^下されと。しがみ付^{ハル}たるかなし(九十二ウ)さを。見るにたまらず人

々はまろび。ふしてぞ泣給ふ。兄の喜作しあんを極め。是々尼御。妹は眼前の敵。又某は御親父伴良の敵。首取り給へと座になをる。いやなふ自らこそ繁の殿の敵。手にかけ給へとさし付る。母はかけより喜作のかはり。我カ首めせと三人がサア某を討チ給へ。イヤ自らをいや我をと。死を争ふも当前の。歎きに生根乱れ合イ。顔見合わせて一同にワツト計に。泣沈む断。せめてあはれなり。

かゝる所へ物具の音さはがしく。かす毛の駒にくら置カせ。ぐんぜい引キぐし武者一騎表にす、み。八ッ橋村喜作殿とは此家か。たそ頼みたしと呼はる声。何ごとかはと走り出。ことゝ敷キお尋。喜作と申スは某(九十三オ)何方よりとあしらへば。重畳満足と。内に入て手負を見るより。こりや繁のみ女郎きうせんにかゝり給ふか。御老母いかにと驚く体。

ヤア八まん六郎殿ではないか。ヤレ珍らしや恋しやと。母の詞に手負も這より。塩治のお行衛我身の上。尼兄弟のこと迄を。問も語るもうき涙又改る計也。始終を聞て八まん六郎。扱は貞よ姫の姉君とな。御愁傷さつし入ル。貴殿近藤太郎殿とや。各別心は有ルまじ吉左右を聞給へ。主人塩治判官討死とひろうし。本ノ国雲州に忍び時節を窮ふ所。直義が悪逆露顕し。將軍直の御進発。折りよしと跡目を願ひ。早速千代松君に先陳の位付けられ。五百騎の御(九十三ウ)加勢。殿の胤とは云いながら御幼少の若君。馬上と云イ物恐れあつてはいかゞ。太郎殿は御馬の口取り御かいほう頼みたし。先々若君の御装束御もの、ぐも持参する。いそいで御用意有べしと。聞て手負ははひより。ナフ其時を待兼て。恥をあらはす我からだ。人畜生の生根にも。我子の出世を待ツ計。どれゝもの、ぐめしたるか。見せてゝと立上る。げにせんだんなふたばより。其氣にそなはる千代松君。孫にめのなき老の身は。悲しさ忘れ声高々。ヤツチャ若君召たる装束。わやく目とは勇氣の印。

着初召シ初鑑の武者ふり。天晴大將わこ様。我君様とぞ(九十四才)譽にける。老の詞にいさめられいまはの繁はかほを上ケ。心程成ル世に榮へ。跡とふてたべ千代松君。門出を祝ふ軍神。血祭りはこれこれと。おさへし疵の手をはなし。血汐を見せる親心。老母も尼も取りまぜて。歎きにうつる親子兄弟。六郎態空吹ク風。ヤア〜若君。只今母御の御さいご。お暇乞の詞はなきか。何か、さまがしなしやるとや。伯父様早ふ軍にいて。切り合イ見たいとぐはんちよなき。詞も天性。望も天性ハツト恥入喜作が涙。是々六郎殿若君の御急ぎ。一時も早く出馬。げに尤と云いながらいはきならねば六郎も。思ひやる身の尾張から。近江路さしてうつ立チ(九十四ウ)軍勢。引きたて御馬しい〜わつといふ声も。泣か笑ふか鯨の声見送る老の声くもる。くもるかす毛の駒の足。ふみ出すおとはどう〜。どうどこけては立チあがる。手負のからだあけに染。そめてくやしき尼の身も。思ふ夫が世にあらば、共に秀る道芝の。草葉の陰の恋しやと。我レも涙の跡やさき。先は軍勢魚鱗鶴翼。右は六郎左は太郎。龍虎両勇両輪の勇士。此方はめいどのつみ大將。しやばの花守リ引かへて。地獄のそのの釜守と。成母が身が恋しくは。の、様祭り花遊び。香をくすべてとふてたも。わかれにま一どかほ見せと。呼におくれて(九十五才)千代松も走りよるを立隔。伯父がにらめばこは〜も小手招きして物いはず。いはさぬふたりは軍勢の。見るめをいとふ分捕高名。手がらは仕がちぞ直義が。首引ツ提て勝軍其時目出度ク迎ひのこく。待ぞ〜と三人が。見送りやるも涙の名残さらば〜のうき別れ。いさむは鯨の声計。心は涙しの、めに三河の。国を立にける

第五

世人ン青天の意を解せず。空しく身心に愁をなす。足利左馬ノ頭直義は。伊賀ノ守がす、めにより。師直を後詰に残し中国

の軍勢をあつめ。御影の（九十五ウ）森に付ケ城築よする敵を待受たり。

征夷大將軍足利義詮。連銭葦毛にゆらり乗り。かけ出給ふ其跡に。同ク馬上の幼きは。塩治が一子同名千代松。近藤太郎

八幡六郎。其外の軍勢共。思ひくに出立て。うんかのことく満々たり。

大将義詮大音上ケ。叔父左馬ノ頭直義朝臣それにて能聞シ召せ。塩治判官をざんそうし。在京の屋敷を賁。都を立退軍の企。

某討手に向へとの。論言を蒙れば。武士のならひぜびもなし。イサ一戦にせうぶあれと。の給ふ内より近藤太郎塩治が一

子を後見し。八まん六郎声々に。我レと思はん者あらば打て出よと呼はつたり。聞より測辺伊賀ノ守。追手の門（九十六オ）

を押ひらき。忝くも先ノ將軍尊氏の御舎弟。直義公に弓ひかんとは。天命しらぬ愚人めら。アレ打とれと云よりはやく。伊

賀ノ守が郎等に高沢次郎照宗。太刀ひらめかしかける。かくと見るより近藤太郎。甥千代松が名代に。奴某が手にかけ

んと。真先キにす、みよりニタ打三打うつと見へしが。コハ叶はしと高沢次郎。逃んとするを後げさ。一二つに成ッてぞうせて

んげる。

是を軍の始メとして。直義のぐん兵共。大勢一度に乱れ出。打ッてか、れば近藤太郎。八幡六郎かけ合せ。三略八陣心に

持。四方十字にわつて入りおめきさげんで三重へ戦ひけるさしもの大ぜい。切り立られ海へ逃込陸地に討れ。肋かた先キ膝

の口。手負死人シは山（九十六ウ）より高く血汐は海を染てげり。

残るぐん兵逃失て。直義朝臣はかくごを極め。逆木引キ退おどり出。ヤアく伊賀ノ守。みかた討死敗北すれば。匹夫の手

にか、らんより。汝と共にさしちがへん。サアくさいこと引キ立られ。ア、是々はやまるまい。か様のかんなん凌いでこ

そ。大望成就もとのみの基もとなれ。此師直はなんととして。後詰ごづめの約束うちがへしぞや。アレ又大うぜいかけよすれば。御ごじがいも叶ははぬ所ところ。某ウに御任せと。そハルろにす、め城へは入ウらず。しげれる森に引ウわかれ身をちハめてぞ忍しのびゐる。

かく共ともしらず義詮よしぜん脚。皆ハル引ハぐして押ハよせ給へば。しばしく物申ものまさんと袴はかまの股立ももチ高声こうせいに。よばはり来る侍さむらいイは。武蔵ぶさうノ守しゅ師直しちく御前ごぜんに畏おそり。此こ(九十七オ)度直義ちかよの反逆はんぎやくは。伊賀いげノ守しゅがす、めにより。又は右大臣みぎのちか具親ともちかが。貞さだよの前に心を懸か。媒なまめを頼たのみしより主人しゅじん本ほん心しんを失うなへり。天子てんしは是こゝろをしろし召よれず。直義計ちかよけいの悪逆あくぎやくとて逆鱗げきりんはぜひもなし。今日の軍いくさには某

後詰ごづめをなさんと偽いつはりり。直義ちかよの心こゝろを懲こらしめ。一命ひとことを乞受こゝろんと刃向やいばむかひ申まさぬ此出立こゝろ。右大臣みぎのちかと伊賀いげノ守しゅ。かれら二人ふたりを討取うて。主人しゅじんは助け給たまはれと涙なみだと。共ともに頼たのむにぞ。義詮よしぜんも感心かんしんあり。汝なんが忠義ちゅうぎは去いルことながら。禁庭きんていにて右大臣みぎのちかのさたはなし。其方そのかたが詞ことばに随したがひ勅定しつじやうは背そむかれず。其方そのかたより此義詮こゝろが叔父おじに敵対てきたい奉たてる。心こゝろの内うちを推量すいりやうせよと落涙らくなみ有あぞ殊勝じゆくわうなる。

師直しちくハツト(九十七ウ)地ちにひれふし。ひたんの涙なみだにくれけるが。御意ごい御尤ごより何なにとせん。主人しゅじんうたれぬ其そのさきに。某あつち先まだち申まをさんとかくご極めて立たあがり。ヤアくそれ成なルは塩治しんぢが一千代松いっせんたいまつとや。子細こさい有あて汝なんが叔父おじ。高則たかのりは某あつちが手てにかけたり。叔父おじの敵てきサア討うと。いひかけられて千代松いっせんたいまつは。叔父おじの敵てきと聞きからに。アレ首くびとれといふに随したがひ。近藤きんどう八幡やちばん走はしりより。四郎しろう左衛門ざゑもん高則たかのりの敵てき抜合ぬきあしてせうぶせよと。既すでにかふよと見みへける所に。後陣ごじんの方かたより高声こうせいに。ヤアくそごつ鹿かの敵てき討うち。四郎しろう左衛門ざゑもん高則たかのり是こゝろに有ありと。かけ出でたる武士ぶし。右大臣みぎのちかになはをかけ。引ひつれ来るをよよく見みれば。塩治判官しんぢはんくわん高貞たかさだ也なり。(九十八オ)師直しちくいさ、か心得こころえず。其方そのかた生な死ししれざりしに。高則たかのりと名乗なをて来る。心底こころいかにと問とかくる。ヲ、疑うひは尤より々々。塩治判官しんぢはんくわん議奏ぎそう受うしと云いながら。帝みかどの逆鱗げきりん蒙かかりし者もの。天子てんしには二言ふたごなし。勅定しつじやうを立たん為ため討死うちしと世上よこへ披露ひやうし。本ほん国くにへ立た忍しのび時ときを窺うかがふ

折から。將軍討手に上洛と聞。たんばごへに都へ登り。待從尼に出合し。御辺が忠義、御辺が悪逆。右大臣の横れんぼ。一々聞て奏聞せしに。此悪公家が白状により。直義の罪軽くなり。義詮の心任せにすべきよし。此右大臣はきかいが島へながし。伊賀ノ守は首うてと勅定受てかけ付ケたり。塩治が跡目は是成ル千代松。(九十八ウ) 我は叔父の高則なり敵討ツに及ばずと。いふにいづれも胸ひらけ。義詮も御悦喜有り。直義を助けんと。聞クより師直刀を抜。腹にぐつと突立る。コハそも狂気か何故と。の給ふ姿を頭で三拜。主君を助くる御厚恩。お礼を申ス詞はつきず。我は主人を諫ぬ不忠。仮にも貞よに不義云いかけ。高則を殺すといひ。一ト方ならぬ大罪人。我打果なば直義の。本シ心を引おこす。一つの種共成リ申さん。各さらばと突たる刀一もんじに引廻せば。直義木陰をとんで出。ヤレ師直誤つたり。我善心にかへるを見よと。一念発起の髪切り捨。武道をやめて今日より。惠源入道と戒名し。汝が後世を弔ふ(九十九才)べし。今迄の積悪は。ゆるしてたべ義詮と。後悔あれば將軍も。勿体なしとむつまじく。叔父甥和合の其有様。見るに師直うれしさも。よりはりはて、言舌たへ。主人のかほを打詠め。につこと笑ふ限りにて草葉の露と消にけり。

皆々あはれを催す内。塩治判官眼をくばり。アレく未森の内。鳥のさはぐはくせ者あり。さかせよやつといふ声に。御辺はあはて、走り出。逃んとするを近藤八幡。双方より切り付れば。さげんでどうどなる所を。義詮くびをうちおとし。逆臣退治御かいぢん。尊氏將軍二代目のかゞみと。世々に。へてらすなる(九十九ウ)

名筆懸物そろへ

征夷將軍義詮御影の森の勝軍。治る御代の恵とてあふぎ都のまつりごと。民のさかへも弓矢神。正八幡の御加護とおと

こ山に御社参あり。臨時の陪從神樂歌。朝倉がへしこと終り。社務善法寺に入り給ふ。かゝる目出度キ折からに侍從尼が所持したる。釈迦の絵像を奉り。御めにかくれば別当社僧。我おとらじと秘藏せし。名画名筆懸ならべ。数は十幅代は万歳。君をもてなし奉る。心も詞も。及ばれず。かくてその後義(百才)詮卿。さらば一見いたさんと。立より是を見給へば扱も。みごとの次第やな。先一ばんにかけたたるは。梁の武帝の御筆にて。しゆつさんのしやかのぎうをぞ懸にける。此御仏ヶと申すはじやうぼん大王の御子。しつた太子と申せしが。十九にて御出家有りだんどくせんにわけ入て。あら、仙人にみやづかへ。なつみ水くみたきゞこり。なんぎやうくぎやうこうつもり。三十さいにて御じやうだう。四十九年の説法は。一さい衆生我ごとく。一ぶつじやうどたるべしとの御のりの。ちからにひかれつゝ。十悪大逆のにんげん。非情草木にいたる迄。しつかい成(百才)仏せんことは何うたがひの有べきと。忝くも御大将。たなごゝろを合させ給へば。しるもしらぬも一どうに。皆々手をこそ。合せけれ。第二ばんの懸物はしんの王ゑんが筆の跡に。りうもんの瀧のながれをこゐののぼるいきほひ也。そもく。此瀧と申すは其高さ八十丈。みなざりおつるいはなみをたまぐ。のぼりゑたるうろくずはたちまちに龍とけして。天上するがゆへによつて。りうもんの瀧とは名付ケたりさればせんぢやうにさきをかけ。名をばんにある者。ひとへに此こゐの。龍となれるがごとくなれば。やあ心がけのさふらいはと。とりわけ。(百一才)此絵をしやうくはん有べしとの御説也。第三ばんにはしやうせうのよるの雨。遠寺のかねのほぐと夕日うつるふうらざとに。ふねこぎかへる折りふしに。へいさにおつるかりがねの有かなきかの有様は。聞しにまさる八けいの。ふでをつくして見へにけり。第四ばんにかけたたるは。おの、小町がいたづらに。身は百年のうほとなり。やぶれみのにやぶれがさ。うきふ

ししげきくれ竹の。つゑに。すがりて。よろ／＼と立見ればあふさかの。せきのしみづにかけうつるおひのすがたはあさましや。かのふかくさの少将の。雨のふる夜も(百一ウ) くらぬ夜も。風のふく日も。ふかぬ日も。人めしのぶのかよひちに。心をつくし身をくだき。思ひにきゑし其むくひ。あはれげにいにしへは。花のすがたといはれし身のいつのまにかは引かへて。あるにもあらぬおとろへの。しやうじやひつすいのことはりはたゞめの。まへとぞ見へにける。扱又五ばんには。かのものろこしに名をゑたるほしが。桜をぞかけにける。春まちなねてさく花の。にほひにうつる。うぐひすはおりしり。がほのふぜいなり。六ばんにはわがてうの其むかし。ゑんぎのみかどの御時に。じやうずのほまれかく(百二オ) れなき。こせのあふみがかきたりし。あさ沢水のかきつばた花むらさきの色にめで。かほよ花とぞなづけたる。かげにねふれるゑんわうの。はねと／＼をうちかはし。ふかきちぎりやかはすらん。扱七ばんには秋のはなの、へくさづくしき、やうかるかや。おみなへし露おも。げなるはぎか花。思ひますほのいとずき。たれをさしてかまね。くらん。ゆめのうきよはあさがほの日かげまつまの一トさかり。げににんげんのゑいぐは迄。思ひしらるゝ、あだしの、くすのうら風身にしみて。かほりゆかしき藤ばかまつりさせよとなく(百二ウ) むしの。声も有るかとうたがはれ。あらぬふぜいをつくしたり。扱八ばんのかげ物は。かのかなおかゞ筆の跡にふじのたかねの一トかすみ雲より上を。見上ければ。かのこまだらにふる雪の。時をもしらぬおもかげは。三国一のめい山やと。いはれしもことはり也。ふもとはたこのうら波や。打出見ればみほがさき。松のむらだちはる／＼と。みどりのそらもひとつにて。きよみがせきの明がたに。おきつがはらのむらちどりおのがともをやさそふらん。しほ風松風ふきそひてふゆのけしきは物さびし。九ばんめのかげゑには。竹のはやしにすむとらの。ふきくるか

ぜに(百三才)いさみをなし。身ぶるひしたるあり様は。げにいさぎよきひつせいなり。扱十ばんにはこれもまた。わがてうのゑかきにてちゑだの。つねのりといひし人。かたじけなくもちよくめいにて筆をそめしとうけ給はる。ほうらいのしまのかたちなりりのいさごの其上に。むれゐてあそぶともづるは。みぎはの亀にたはふれて。ちよよろづよのひめ小松。よはひやきみにゆづるらん。四かいなみかぜおさまりて。ゑだをならさぬ松がゑの。ひさしきためしこれなりと。いよくけうをもよほさるさて。おさまる。筆こそめでたけれ(百三ウ)

右伝ゆる所の正曲の調は節博士何も其品多し

七行和漢大字のかなつかひ迄世間あやまりてあざ

むく類板を出す甲乙てにはのたがひわつか成とても

正本にあらずこのゆへに西沢九左衛門義教改て梓

に寿く手花押の記を添る事しかなり

豊竹上野少掾

大坂心斎橋南四丁目西側 正本屋九左衛門板